

## 付載第2 愛知県における石棺を有する古墳

今回、小幡古墳の調査で、内部埋葬施設としての石棺に接する機会を得た。これを契機に、愛知県において石棺を有する古墳を瞥見してみた。石棺を有する古墳の地名表は別表のとおりである(註1)。

石棺を有する古墳は、今日までに確認されているのは27基である(註2)。これを地域別にみた場合、濃尾平野では14基あって、愛知県内における石棺を有する古墳の半数を占める。知多半島では古墳の総数も少なく、東海市の1基を数えるのみであるけれど、三河湾に浮かぶ日間賀島に2基があって注意される。西三河地区では、岡崎市2基、幡豆郡に4基を数えるが、幡豆郡の2基は、同郡佐久島にあって、日間賀島の2基とあわせて考えると、離島における数が多く、古墳時代における両島の政治的、経済的位置を示唆しているものの如くである。東三河地区では渥美郡田原町に4基が集中しており、豊橋市や豊川市には石棺が作られていない。

濃尾平野における石棺は、犬山市と一宮市に家形石棺が集中している(註3)。この地域的特色については、かつて久永春男氏が尾張氏の一族である石作連が支配する石作工人集団の存在を指摘されている(註4)。このたび調査した名古屋市守山区小幡古墳と名古屋市千種区城山古墳の石棺の素材と技法がきわめてよく似ており、同一工人集団によって作られた可能性が大きい。

石棺に用いられた素材の共通性という点からは、濃尾平野北部における凝灰岩、濃尾平野東部における泥岩(シルト岩)、渥美郡田原町におけるラジオリリア(註5)は、いずれも古墳の近くで得られる石材を用いている。

これらの石棺を有する古墳が営造された時期は、須恵器の編年上第3型式から第4型式にかけてであるが、瀬戸市穴田第10号墳のように8世紀初頭に比定されるように後出の例もある(註6)。

石棺の形態からは、家形石棺と組合式石棺の二形態に限られるようであり、家形石棺も単純な形態をとり、組合式石棺では石室内に直接つくりつける形態が多く、近畿地方にみられるような多様性は認められない。

以上、石棺を有する古墳についてみてきたのであるが、細部については今後の課題

| 古 墳 名        | 所 在 地        | 墳 形 | 石 棺   |
|--------------|--------------|-----|-------|
| 上野第1号墳（雁追塚）  | 犬山市上野町字郷     | 円 墳 | 家形石棺  |
| 高橋古墳（羽黒古墳）   | 〃 羽黒         | 〃   | 〃     |
| 富岡古墳（永洞古墳）   | 〃 富岡         | 〃   | 〃     |
| 善師野第1号墳      | 〃 善師野        | 〃   | 〃     |
| 善師野第2号墳      | 〃 善師野        | 〃   | 〃     |
| 浅井第14号墳（岩塚）  | 一宮市浅井町尾関     | 〃   | 〃     |
| 浅井第18号墳（人麿塚） | 〃 河田         | 〃   | 〃     |
| 浅井第21号墳（愛宕塚） | 〃 黒岩         | 〃   | 〃     |
| 坊主山古墳        | 春日井市大泉寺町     | 〃   | 組合式石棺 |
| 御鍋山古墳        | 〃 熊野町名栗      | 〃   | 〃     |
| 小幡古墳         | 名古屋市守山区小幡小林  | 〃   | 〃     |
| 川東山7号墳       | 〃 守山区大字川字東山  | 不 明 | 不 明   |
| 城山古墳         | 〃 千種区田代町城山   | 円 墳 | 組合式石棺 |
| 穴田第10号墳      | 瀬戸市穴田町       | 〃   | 家形石棺  |
| 釈迦御堂古墳       | 東海市父町釈迦御堂    | 〃   | 組合式石棺 |
| 北地第6号墳       | 知多郡南知多町日間賀北地 | 〃   | 〃     |
| 北地第8号墳       | 〃            | 〃   | 〃     |
| 窪地古墳         | 岡崎市細川町窪地     | 〃   | 〃     |
| 森東古墳         | 〃 岡町森東       | 〃   | 〃     |
| とうてやま古墳      | 幡豆郡東幡豆町山崎    | 〃   | 〃     |
| 西川原古墳        | 〃 吉良町西川原     | 〃   | 〃     |
| 山の神塚古墳       | 〃 佐久島字白浜     | 〃   | 〃     |
| 平古第3号墳       | 〃 字平古        | 〃   | 〃     |
| 籠池古墳         | 渥美郡田原町籠池     | 〃   | 〃     |
| 神明社古墳        | 〃 北番場        | 〃   | 〃     |
| 柳沢古墳         | 〃 柳沢         | 〃   | 〃     |
| 新美古墳         | 〃 西神戸        | 〃   | 〃     |

としたい。なお、本稿を作成するにあたって、大下武、小野田勝一、木下克己、斉藤嘉彦、芳賀陽、牧野彦一、宮川芳照各氏の御教示を得た。記して謝意を表する。

註1. 地名表を作成するにあたって使用した文献は次のとおりである。

- (A) 『愛知県遺跡分布図』 愛知県教育委員会 昭和47年
- (B) 『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』 愛知県
- (C) 高木志朗・宮川芳照・杉崎章『上野古墳群、愛知県犬山市埋蔵文化財調査報告』犬山市教育委員会 1968年
- (D) 『一宮市史 資料編三』 一宮市 昭和38年
- (E) 『春日井市誌』 春日井市 昭和38年
- (F) 久永春男・田中稔・伊藤敬行『守山の古墳』 守山市教育委員会 1963年
- (G) 久永春男・田中稔・伊藤敬行他『守山の古墳 調査報告第一』 名古屋市教育委員会 1966年
- (H) 宮石宗弘・山川一年・杉崎章・柴田鐘三『穴田古墳群 第2集』 愛知県企業局・瀬戸市教育委員会 1973年
- (I) 『豊田市の遺跡』 豊田市教育委員会 昭和48年
- (J) 斉藤嘉彦・山口豊『窪地古墳・島ヶ根古墳』 岡崎市教育委員会 1976年
- (K) 吉田章一郎『佐久島の古墳 一色町誌資料第1輯』 幡豆郡一色町 昭和42年
- (L) 『田原町史』 渥美郡田原町教育委員会 昭和46年

註2. 春日井市神領にある高御堂古墳の後円部に石棺が存するという伝聞があるけれど、石室の誤認であるおそれがあるので除外している。また名古屋市北区桶町味鏡護国院に刳拔式石棺の棺身があるけれど出土した古墳が不明であるため除外してある。名古屋市守山区川東からも石棺が出土したことが『東春日井郡誌』に記録されており、出土した古墳の位置も確認できたのでつけ加えた。

註3. 註1.の文献(C)による。

註4. 久永春男「遺跡遺物の取り扱い方」(『日本歴史講座 第8巻 歴史教育編』 河出書房 昭和27年)

註5. 渥美郡田原町の渥美湾(三河湾)側に産出地があったが、現在はなくなっているということである。

註6. 註1.の文献(H)による。

(七原 恵史)

### 付載第3 守山区寺林古墳群と出土遺物について

去る昭和45年8月に、名古屋市教育委員会から、守山区大字中志段味字油石で近く宅地造成が行われることになって、この宅地造成予定地に地目が「塚」になっているところがあるから、事前に調査を行うよう依頼された。

宅地造成予定地は中志段味の北東部で、付近の地形は、標高45mの中志段味の段丘が、S字状に彎曲し、彎曲部に標高36mの低い段丘がテラス状を呈している。段丘は、北東側は、庄内川の支流である野添川に開析され、段丘の北西側は庄内川の氾濫原で、現在標高28～29mの水田である。

地目「塚」は、下位の段丘と水田との境にあって、水田面より60cm高く、畦畔に囲まれた平面形は三角形であった。「塚」上には砂利や礫が堆積し、これに混って中世陶器の破片が入っており、古墳とはかけ離れたものであることがわかった(註)。しかし、「塚」という地目が残っているのは、この地点ではなく、近くに本当の古墳があるのではないかと考えた小出良信と筆者は、「塚」の東方約50mの地点にある竹藪を歩いて、ここに直径約7m、高さ約1mの古墳らしい盛り上りを見つけた。そこでさらに、この土地に詳しい人はいないかと探しにかかり、最初にお会いしたのが川本軍二郎氏(当時82歳)であった。氏は、むかし、家を増築するために、自宅の裏にあった小丘を壊した。このとき小丘の裾から甕が出土し、この中から遺物が出土したので、保管されているということであったので早速拝見させていただいたのが石釧1個と仿製重圈文鏡1面であった。これによって、この段丘上に古墳が築かれていたことが明らかになった。



第18図 寺林古墳がある段丘